官刻孝義録　巻廿一

陸奥　十

ロ9
1596
21

（蔵書印）

孝義録巻之二十一

陸奥國十

奇特者権内

若松乃城下一の町にて権内といへるハ細物をうり絹つむき
麻布木綿其類商ふ者なり家ゆたかなれと常に倹素
をまもりて若き頃より先祖の祭り礼を清くし家の
業怠らすしてあまたりあるをもてたえることなし下つ人乃
男女にいたるまて恵ミふかく教へさとし親族に睦
しくまつしく貧しき老をいたハり病者を賑ハしたる
事数ありとさち悔しまゝ拾ひあつめ坂やくそ此時すら渡

門 1596 21

蕩尽したるはわれ家をそこなふのみか子孫の料をもつくし
今たちまち飢に及ぶ事これはおしむべき事なり又必
米塩味噌やうの物人ごとにかならず備りぬ醤の店
なども売るものなれば人も其たよりをえて業絶えずなれる
生計急なる時にかゝるものゝ人々功あることも多かりき
又貧しき者なかく室に居て商人参りても治むる人なり
ことをみるに数々其価の高きをそこなふ事をおもひ
いつも其人はいのちながらへたる貯へあるとしるべし
へる所あるさかひの道にもみちをつくる利をえんと思ふ
事は愚かなるも行ら須人あまたつどひて物語せるまゝ

善をすゝめ悪をおさへて慎みたらんとぞ人々いひけるある
ところの人の屋にて飼ひ育てる猪の力もありける孫といふ天性死
事を好みて陰徳数多かりける商の業につきて
京大坂の旅路にておりふし馬駕籠をもかりて旅すれ
をおそれて屋しきに身をおきて人の肩におそれ馬より
其のしるしを示す価の徒をしのびてうちよせ
馬子人夫の人多くにしても価の高からぬ事を
なくしもうれしく小文十文多くなれば人の
ことかく身に施したる広く人に施す事を
悦びぬ其後伊勢参宮の道を遍くしつらへ物

かゝる所にしかと落んとせしを彼川瀬を渡る人是をみよ
たつねしにひとりハ千田の子なりし此童の父をとふに銭やなる
甲けん橋ちかくにありしを何もやとみる内にもあり次く流
れ行く人も見て渡りかねし程ある所に彼令の童
まつすけなる價を里にはかり十人しても得ハ人丈ほと
をひて水に飛入りて彼童をかれいてきしかあけし
をや息もあらす人々かちかへりぬ醫者をよひくすりして
息出てすこし潮の氣のぬけて生れいてゝかはりなく
より伊勢に詣るにてありけるか是をうらはれにて
宮を参りして松兵衛に仰へ料とし銭をもとらせ

きたりし後彼童か家へとりつかし時々の物など彼家より
日々仕候年季ものなとゝていかにも詫いひて帳にとらせ
尤候ハ必此兒乃命を全とさせ何の人又其人の性質
によりて我子同然に思ひなして他へも先つ年季すら
是此家かうせなとすて数年も数なかりき寛延元
年頃まて及ひくれをあつへ褒美せしとなり

忠孝者せん

せんは若松の城下材木町の年貢地に住める右衛門か
娘なり幼くして母におくれしかハ父ひとり男手にてそだて
思ひ渡世にもとのまゝくらし後も父の身にさし同し城下甲賀

町に治郎左衛門といへる者は吉文ふかくして六十にあまれ
るか妻久しく病ありて起臥を扶く庭の妻もうせ
にしかハ治郎左衛門まかなひくらせんと日夜をひのやう
に嘆無しう人かうをいやしくて次第まれやうに老をいて
あり玄心ゝ子とも二人ありしうゆゑかハかまようすう
是見てうけりをて忍はは娘なうとも治郎左衛門とゝもに
つくせく我吉の子として其弟は別家まかくれすぬへり
治郎ゟ二人の子も治郎左衛門も朝夕かゝろく病をと
ひ来れことをのまいくう職業をいとなみさまつてり
下法人此をのこ二人をつけをなるとせん二十六乃年より

清く流ゐ食物菜の類しお乃ゝ何くれとなく心を
尽仕へしおりくゝを病ぬるとも起臥の病乃
まぬらかしおとやとなくけ夜ごせ少人常し免させ
あさまれとをかせいつ家を遠の帰りに途ふるま
孝切なり先祖乃墓詣くゐひともくハ此家の世よる
種子まれをまとゝりて痛みの薬をもちくら文湯を
汲く腰より下を洗ひ引て此二便まとせ小物ひ行
至る枕元にありあかしらひと其ゟ物縫ゐとし
て寝酒をも分量を定めくすめ孝心ゐとし八十有余
まゐといふまでなることとせゝゆゑり二年を経急の郷く

はえぬせんか父文右衛門も八十一にあまり母も六十七になれり
貧しき暮しなるをせんか勤めれは光やうやうなりけり
歳ころ主人にありしに年つもりて老をひ乃ますけ
とも老その病をまその法をもらうしる屋をとし去年の
頃又右衛門となりくやうやうまぬかれしとも事かへりて
人の大切なれとも父主人にあつかひとも見ゆるへ何老も
あらねは思ひ悩みひしか志ふ心をも生人ほとなかる
折からおほつかなら次父まつ人ふと助けしかは恨
胸なくて絲こひ夜更くるより又右衛門かわらにゆきて食し
茶なとも何かとかく暁るまて必すかかぬ志ありく此日

数をかさひて常さし主人乃用をかゝえ志らきを父於屋し
なをひもをろそかならす次父我木町乃うちに石塚の観
音とて行るに乃我行をらひの立願くよ立よりて父乃
病を祈りしかは甲斐あらて終に父の病いえぬ
かくなるすれは我身にかまひなかりかたて縁いとふ事をも
てたえひよら次第さもら主人と父母とに仕ひをなと
せしかは領主よりほうひを忠孝を賞して米代あまた
たまはり寛延元年乃事とそ聞えし

奇特者清一玄瑞

會津郡中地村の百姓に清一玄瑞とてすくれて実貞なる

者あり年若くて清吉といひし頃よりまめやか
に農業にかゝはりて其功多かりし中にも赤穂といふ
名つけたる稲はかの稲一本穂に出たるを見付其
にゑりわけおきてやうやう増して次の年の種とせし
かたるかしこくもよき稲となりて後其人もおなじく
植させぬはなく世に広くして其種のことはりに費さへ
上をも益したるのみならず領主の城の方へ奉りたる
折よりも清く籾をゑりて毎年に新穀出来れは
鯛海老かますしらをといふ五の魚を添へて必是を備へ其
より貯へなどもいふ村長始め人々もほまれ合て絶さりしと

く飯を送り其後家出しけるより食しかねるすべての物
初めておさむれば必ずかく持しけり妻の始より此二
品に飯を備へおのれもちり領主の事を案し貢物は
何よりの諸役をもそく人馬の数を出さしむる事をも
さ次ことし八十七になれる母につかへて孝を尽し
親族に睦しく近隣にもたゝしからず妻子をいましめ
農業に力を尽しければ数田もふやし今のものとなれり
て今はこ二十石余の高持となりて家も富み栄えん
出初し稲草も多くに植えりこの種は赤穂の名を
とりしを今は清吉かくりとて名つけたりし

孝なれ稲をはなちぬ寛延二年領主へ此よし聞へけ
れは褒美に米をそへてあたへ給ふ

孝行者治右衛門

治右衛門は若松の城下の町乃町屋にすミける
ものなれハ原乃町斎藤左衛門か方へ日々にかよひて椀の木
下地細工を業とせしかされとも賃銭もいとかろくなりけれ
朝夕の煙も細く夏冬の衣さへこと欠きぬ六十余の一人
まれ母のありけるか母ハかく病者にてありしか常に
病をのミわつらひ身乃衣食にしても心のまゝならぬ事もおほ
けれは人をやとひてつかふ事も治右衛門ハいとま無れハ

会拂をとられハ毎月八ツ時過より汲水を汲薪をとりすまして
朝夕の食をまかなひ屋にて仕事に出るにも職業をはしめ
置て立かへりて昼飯をととのへ宿へ帰りて又夕飯
をまかなひ茶をわかして毎にすゝむるかくの如く事なと
いひく常にせるか夜ハ日乃くれぬれハ後ハ人のなす業
も終りて家に帰るに又夜ハ入て帰りてもまた火桶によせて
あたゝめ母の寝て後ハ心やすむるものにてありし又ある時
会津の母乃いたく病みけるか月ハ夜乃衣一を着まゐらせて
夜を明しける業に出すして先母の寝さめをもまもりて又は暮
屋に出る時も必家にかへりてハ母のかたハらにて裏乃

庭に遊ぶとしれとく母と共にゆき煙草などもてなし
けるが物語などもきかせて慰めはべく家乃貧しきなど
語りも聞に常に治又左衛門といへる伯父これを見てかれらを
世にまれなる母とは我方に貰ひ取り養はんといへど
たとへ人の舞ふとも母の身を離れては生涯も終らばと使ひを
断りしといふを親の後をたちて母の身も代離れずと
孝を守り次を母をうけて後見治兵衛なりしが初めは
上田北町の九右衛門といへる塗物細工の弟子となりて七年
勤めしやつれ人ともなりて須又治兵衛と云ふ者のもとへ入りて屋
敷の世をしらせ奉公人の手に殊乃外老夫婦の心に叶ひて親のもとへ

かよひ手伝ふを志す所の家主用を忘るる折たのまれてき
たりて事のかれよしものを調へ納め其町乃ものども此様を
むくむ事なく親族にも睦まじく寛延二年の頃
領主より米をあたへ其孝心を賞せしとぞ

孝行者みよ

みよは若松の城下西名子屋町の飯治織忠右衛門が娘にて
母は同町左兵衛といへる者の妻なりしが生れつき実義
に直なるものにてあれは男乃七右衛門に添ひ人々よく孝状
を尽せり七右衛門は年六十に余り其のち延享四年乃
夏より中風を病みて手足叶はず次第に弱りて事も

わるさかしく物いふこともなくしてすなほなるを丈左衛門
日ころ伊右衛門家職に出るときハ妻ふみ一人ねんころに紡績を
なしつゝ朝夕の食事をはしめ髪けつり衣きせ
ところは水つかはせ二便の器をあらためそれより足のうら
まてさすり腰膝のいたむ時ハ揉ミとり夏ハ涼しく
冬は暖かに旦暮とりまかなひ其冬は湯あみして洗ひける
病をもやはらげしむ長病に倦る色なけれハ老たる
姑をよろこはせむとて男はそのこころかねて思ふ
そして物をつかひあるは草花をも壺にさし人里の
子に息もつくまてもてなしかひ又ハらしのかほを

庭に出なれは好む草木などうゝへ行は男を背おひ
いくたひかたなとらへみて慰む病の事もよくみうれへて
神仏の祈も数をつくし夜はひそかに来て火をた
きより塩味をも忌しまさりしや母の手足もさすり
御前にて或人は家の内をも清めおりし折々に去年の
卯月同町なる厳寺に法然上人の像開帳して説経
ありて殊に参りしとき男ゆきたきやうなる思ひ
あれとも言えまうさせぬをいさためて人もあひ来りせんといふ
草も人のいふことを聞て丈左衛門兄弟みな
たゝ手をかしく背にかけて抱きかゝへ笠状のうちあ

まづしきひかりもしけるに庄兵衛兄弟は日ころ家士の
ありし又村里にもよく家職をなし異味にあれハ持参へ
町人まで初物の類ハ便のあるたびを見立て次をも在らく二人
の者も家内をさしおき親族と睦しく兄弟の組をも
親しかりけれハ後に町の役人領主にもきこえ出んとせしを
三人ともに孝行にして来里と身に見えたる事ともを
世すらに往なけれハいとひすとてみけれハいまだ出るか
もなりしを叔しともみより行ひ諸人にもよくまじハれり
終に領主よりも人て寛政二年領主より褒美をたまハる
忠義者半助

半助ハ那麻郡讃岐村の民吉兵衛が子領主の家士町野
繁八がかりに八十七年つかへしか中にも忠勤なる事多く
日ころ小朝も起きて水をくみ垢離をとりて後まつと
先祖の繁八が親其外病の折しも病おこりて
又も家のうち北りおやしけるに垢離をとりて
祈侍よいのり病の事にかなしく八木にも力をつくし
家の内のものを見て事ハ童への言葉をも
とりそへても次用水をあらためとて言つくる
をもくて浚しく汲をも見半助彼に行時も全力にても
能楼の出すれ多く浚しけれ後ハ菓園を作り

畔畑をうるひ肉かのみ元ゐうなひくいつくかくる私
欲なくし志ゟ初ゟ半助去年の暮ゟ病ゟ悩しけ
るか年七十にみちぬるまてかく病身やうにつくく
かは病を摩しまりん出あに眼ゟ遊故つまら人せし
まか様く周子ときてつゟりし町乃もの畔畑と作れる
ゐものわ者なとも久しき半助ゟ母をねといふゟうか年
来りて孔病乃ようしとさく家を出生の田楽人く換ゟ
親族のりれもまるさ志ゟせり清めく身を慎しきこ年倫
そのとよのゟ高拝にてもせし事なくを孫しゟゟぬまの
とはいさ見人に悪をうし孫事なく侍ゟ業もまうく親

子の志とく思ひしゟは病乃ちらまと町あ孫く看病し
醫者とくこのころせしもあり々孔をつ思かしゟ
若くに備ゟしひく涙をゆるしき人も一人孔下統を
出しさゟ二三人を失ひし空絶やしゟて宝暦元年堅
に告のせる褒美をうけて業をあたへ里

孝行者清傳

清傳ハ那麻郡松野村乃者にて十一年にて思ゟ若松の
城下る場苦屋町ま十歳ゟ幼して母に別れし年に
ふゟれると見病の痛まそ両眼ともにしゐぬ父と安衆
せいひしつい年すり妻を娶りゟ田畑を耕えく居と

同しやうに清傳もよく思ひしく父ハ叔父のかたに至
てねころにいたハりけるとき田舎のはたらきにも力をも労
しくし堺町にて住居なさむ事を辞し座すからへけれは
いらかをしてそのまゝ家に帰ひなりやと思ひそのまゝ
と叔父に告ぐ叔父を盲人の家よりむかへ参らせ
そこらかのせわなとせよ四年あまりその村の分限との
すれ清傳か家にゆきてもてなし安養湯も人となりて
実直なる者のよき病人あつかれと作るなどあれは
至らされゆきて父子ともに力を一つにて世はたらき
安養湯七十二業よありて老をつくろひ目をとうかして居るへき

此地まてうつりしこ人は須ら座安町ともに安養の業す
されは盲人をよく客の人なりけれは父子ともに糸を
ひきつつかまへ療治をしてし三味線と針治にかへて左様
暑寒にしたかひなく座頭を立て町々をめくり見て里
にて年を老ぬる春より安養湯も中風をわつらひ右手
手足も心にまかせす臥けるに清傳これを抱
きて抜けく食を調へ薬を煎して心にかなふ時分を
いたして病者よあつかひをし療治の先々へ食する物を
業とかくとれよりぬり孫しきたねあれはかへしはなくも
掴へてよそへ出る当にありてはさらに一の物領とし二度の

まさすけも心ばへまことにけなげなりしをある人よみせ頃
衣にあらためそのすゑを去年水無月の頃温泉
まうでんとせしが家貧しくて人屋にすまへるもあり
かゝるやからくに小橋なるを求め出て背にせ径に
日ごとに村治乃晦の頃まで実のなる木を出湯に
ゆきて橋にて手をとりて湯をもいらせ或はその浴を
さへられたり又盥にて湯をくみてその白き楚かすくなくあ
そこは道の里一里ばかりある所なれど山さかしけれ
きに衣をきせつけ事なく参詣なしかひなく大会
と新たなりしとて此志のやさしきをまたさうかへもす

あしはさらに此ばく童のあそびなどにもまじはらで
父母乃ゆかりを二つゆゑありて膝皮よりたつ屋敷のうちを
行きめぐり法花経温泉ある所まで一夜泊りて清き
もとより安き湯に身健なりし時畑の所々自ら
乃身にて畑をつくりて野菜をつくり日ひとつの菜
園のうち小き親と共に老人の作物をつくり此年は八十年
また大病にてかの人を屋内にかへりて看病をはらひ
事を勤めしかば隣家かたへなる所は二間にて二筋乃
小家に住まひて病者の外に臥たまへば常に衣を
いはしてあもらぬ屋外上の雪をはらひふるをあけ

返しける此ものとも労する事なかりき世よし
領主より其まて宝暦二年褒美として米給ありし人
なり

奇特者宗兵衛

奇特者十兵衛

宗兵衛ハ若松乃城下日野町に住けり子を十兵衛と
いふ父子ともに実直なるものにて家の業ハ漆ぬる
細工をせり常に倹約を専らとし商売を励みけるか
まさりたるを外つゝ家産を失ひ次ょく人の困窮を
すくひ細工乃方ゟ又ハ志ある人よりもある者金銭をか

らんといひ或ハ質に遣る品を持来れハかつくに
借しあたへ後まて返る事をもせまき決して
僅のものなりとも誰も憤るはなしかまたる
利足を取らす又は貧しき者にハ利足を返し
又は貸ちかへ其利潤のうちにて米まかなふとして施し
利足をとらんとすれハ皇てなりもちくに事なしわたし
屋敷をこへて利足をもちて先をとり日用のたすけと
なるやうに貧しき者に施しあたへ或ハ念仏講など
出せるを里の老ものつとひて講を結ひ銭を
なかまへ念仏をなす人を葬るにも此役をなすとまれなるもの

僅にかゝへもて餘銭をたくはへし其同し町にすむ老
乃貧しくして死して葬斂するにいとまつしかりしに料と
せりける人にて金銭をかして老人利足乃多く返さんするを
のミ好む井市人のならひなるを父子は老人利欲を
すてゝ人を救ふ事多かりしは其事とはことく
あるいは世に称せる人乃志らさる所も多かり父子かはかり
いへらく家族ハいかに及ひ後を見かり此老の中に
そもそも一人家産よろしくハ何乃楽しき事かあらん
難さくは人をたすけまたひよわき人とて大に助る
楽しき自足とて人の家比する事をみる事まして思ふかたく

すなはち人を救ふを道とたてし親族と共に大病に
して世わたる業のなりかたきその流る窮苦しく
飢寒を凌かさる者有独身にて長く臥ひせるこそ
久しく病床なる家産乏しきもの親をやしなひかたき
又拙き者貧しくして其地を離きし人の家よりの何
あるひは人にて己か力なくしてまた死ひるさる老
其とさるは父子ともに力をあはせて米ハ五升一斗を
いくは銭を二百三百をいひ又衣を給ひ又入をいたして
さらに味噌塩炭薪屋かれものにいたるまてそこ何かと
おもひくらへ年々かならす憐みし老あまたなり

ところ去る年の冬は世のなかかしこのみならすひけり
しく諸人困窮に及し時己か家の飯米の料よりき
きりつめ米六七俵を出して父子ともにおのかありし
ものをみな老ありしもの共に渡しおくに聞つたへけり
薪なともとほしかりしかは薪のたくはへなく
ハ其れよりもそれら人々にとひきくせしを此屋の
上の者も伝へきゝて非料をとらせけれと是にかまはす八丈し
法ありし町に病者ありて人参なとを求むへき便なきを
老乃ためにも友ともに力を合せし時もその数あり加りとも
後ハいつまても来りあまた人ありける去戌二月大沼郡新屋

其村乃民ある六家の女子を取て背負来りぬるか在所の
旅人まては病気にて子をおもふせたるまゝとなりぬ人
き夜もかけ出たる取よりてたゝかいをとりもちて我
子の袷と綿と我脇の二三日まてとりて物をもとり
やうやう文字寄町といふまての宗寺の方に送は
貴とく七八年此かた背負来れる八助といへる者男
小やけの時はあまたの病をとゝのへて汲賃なと信し
てくらを厨のこなたに積て酒合をあたへ入時く
力乃ことよりまかりの薪をもとひかけしは其むく
ひせんとく古う高もの米雑を便よりにあたへまかりし

かはる〳〵に来年ハ世話致しのまかせくかへし
けるに會津郡北瀧沢村より下女を雇ひしか去年の
秋親ともに失ひしと聞て衣服をとらせ銭一貫文と米塩
味噌煙草なとまて日数をかさねて其人に料とあたへける
又春夏の間体自らと定めて百文ツヽ男女ともにあたへ
ことに加へ寺院の布施貧人の勧化なとに又我かの物も
その分限に施しもの比に従ひて其身をたつれハ
宝暦三年褒美として丈子乃者に米をあたふ

孝行者きよ

きよハ若松乃城下甲賀町に住める理右衛門か妻なり淳よ

舅姑よく人にも孝をつくしけれハ丈乃心にもよくかなひ
家のうち睦しくそれ貧しさをも恥す事に暮しけるか
さ振舞をなしける舅此左衛門ハ六十二にて病にかかり
六年前より中風を煩ひて手足も心にまかせす二便の
かよひさへなりかたきを丈婦しくたすけけり姑ハ四十六
歳にて四年前より眼を煩ひしにきよ丈に申して
二親の病薬乃服もあつからせ神仏をも祈りし
とくさむくにん仕せて薬乃通しけるにや母乃
眼ハ快くなりたれと丈ハ塗物の細工せしは去冬此秋よ
り病かちにて手足もかなハされハ療治を思ふまゝ

なく後さよ神仏にちかひて唯茶烟草なとをもたちぬ
かくて日夜に浣と兄弟二人を養ひぬ男ハ成長よなり
ていよいよ母をたすくれとも後ハ家なくして彼か日頃いたつきハ
側にゐて物語し酒をこのめはかひ求めてそすゝめ
兄将棊なとこのましといへはさまさまれあひてを
もとめさせて慰め後中風の病にて半身自在ならさり
されハさよ朝夕の食をくはせ口よりこほれ出る事
いはんかたなく汚して出れを拾ひくひ日数ふる湯茶
の数をぬらしてハ絶さるやうに心を尽し暑の時ハうちあふく
衣服もきたるまゝにて何ふ家にある所の物ハ質に入させつゝ

世わたるいとなみをもなせしといへる彼さよか里の母来り
て見る事ありしに衣の食なけれハ此家の内の
調度も所用の物を皆うりて人のかたにあつけ置しと
かたりて母の心を安からしめしとなん宝暦五年代官より
関東御褒美として米をとらせけり

孝行者勘助

若松の城下花町の借家にすめる勘助といへる童ハ
年十歳にして母につかへ兄の若次か長病を介抱して
ありしか親ハ若年より桂林寺町にありしか七年
されより世をなし家も傾きされハ大町にある叔父の

わづかに兄弟ともにやしなひがたく母と兄弟同
じ町に借家をかり夜は裁縫を業として母を養ける
叔父産業の手伝せり那麻郡小荒井村にゆくことあれば
しばしば勤助にともなはれ手もとを見せなどして是をしへ
給しが去年は夏より兄虚症の病をうけ世の所業
ならずなりゆく母を苦労に付させけれは母も親は
わづかに人し兄を叔父のもとにあづけて病をも養はせ
せんと親族の者のはからひけるを勤助こころよく母を介抱
出し病に沈める兄を離れずとりしめて母のなぐさめ
に葉しさせ給はんをいかにもして一ふしに養ひまいら

せんとてその手つだひも兄の家にうつり日ごとに村里の市より
麦の粉も商ひなどして母の食事をととのへ麦粉をもよく見て
もかはりかね一日に麦百文ほどずつかひては掛うりに
まはり母は鼓をうち人のもとへやとはれて夜をとくに見
世の棚より菓子茶優などかれてるとは此暇にもやとはれ
む事なくおもひ年ちに此者手習をも心かけよく勤助
が行いをみてあるひは人にかたりあはれみける薬をとりよせ勤
助行かへりしかば医師に見せ兄の病のためにと
母の心ならずすまし次いで高なる價の貴き菓子などをもとめ
て与ふる事あらばおのれが腰力をもかせぎて代なさん

かくひとつ孫は母乃掟まもりて兄の病をまもりを
つくし弟をとも小まかなやかなる者なれハ此他まうつ
里住し時も松林寺町小ちかなる友ちら来ろとし人自
をたのひて、きうかは罪賊をむなをえひしとなん此由
領主に告るものありて寶暦七年弟をとも賞し
褒美しき

孝行者なか

なかは耶麻郡小荒井村の貧民又市か妻なり生れ
作さ病な盛りなり舅姑に孝ありまた夫又市ハ多呑と
て田畑さへもたぬ百姓なりしやうくを自くといとなみ

なかは七年おもまも姑中風をやみ言葉もりくらず手足
も自由ならず舅四郎兵衛も病にふし居けれバ朝夕
乃畑もたかしくなりき又市妻に向ひかゆひなく
さもらぬをひるよりに二親ともに病あれば世にたくと
ちんようあらく我身も人に仕へしも女一人の力
なかは二親を告あらさなるへきやといふに親より
ならはされるかなさを病の身なくしかり縫へハいう
まくもて七まる迄姉娘を親里に遣し二人なれる妹を
ちくらんをれ二親の病看とも扶ぬもたとひ人に仕へ
ほとを質券又ハ給を貰ふものなれバ家に在る親の

かへりて給らん事かなふまじく思ひしたくかへりて其身の手間
ちんといふものに日やといに出て其日くの価を得て
親にもみつき給らんためにもらふしなめてらうしといふちからを得て
四年前より里市にいなひて間敷といふものに居をしめ
宿にはたゞ一人のみ舅姑の薬用を扶けて舅乃
病重くなりしかハ夫ともに昼夜をすてゝ療治意をつくし
うとは清井に出世さらぬ母に見えし附を里北者病をとくへ
またく嫁の孝心ありたるにかめ孫して姑をも胡なとり
まいらせ髪をあけ或は湯をとらせしは病
床にありてもみえくるしからず夫ハ日ことに庭を走

行てまかれよ一夜もとくはなる事なれば飯料をゝくへ絶く
なるを姑のおもはくを厭ひて、ひとしくなげくれぬよき
眼あれハ衣ぬひ木綿をうるなど折の餘りにかへし酒をのミ
て飲せ肴異なし衣服とも事かはくなし夫の妹
も同郡塚原村に嫁したるが姑とても病ありしを
見ていつまで舅にかへりそひけるにかへりぬと
をかしうその酒を飲はひてハ食ふをもまいらせ送り
行く又とえるよひ又まいり異なる味あまたのしなを
まいらせ姑にのこくいはせけるは親八郎麻弥吉田村にあり
しかも此内に一二度もかへりてはとひしに小荒井村より

七里ほとある所なれハその日のうちにかへりかたくと夜
更ぬとせしか行くれる姑吉田村乃方よむかひくれを合
せるけく事度々なりしと帰りて後是を語こひ思ひ
あるへし宝暦七年此事領主よ告る者ありて米
をあたへ久しく褒美せらる

奇特者　若者共

大沼郡二日町村に肝煎役をはしむる若者儀といふ者あり
あり一とせ大川洪水しくく下米塚村の端郷出新田とな
村との境なる所川よけ堤をきりて彼里を宮沼川の
落合くいよく向きて海となり人馬の行かよひハまな

よりまえ舟にてよりしかく出新田乃人家ゆるかくなく
も一ちらまたちへ堤をきつれるといひとも二日
町村乃者ハ水門をとふ物をも押あへし川瀬を向く
と海よ流れて道ありさりに絶ぬ此所の民共に男女
となくなりはえたつるひとなるまへ二日三日まて有飢に
及へり甚く彼の若き儲赤裸にありて食物をかかへ
ゆる流れ川をしてわたりて飢人を救ひ樹下に
松村へ行き渡舟を漕さけ大勢のうちより先共
老る者いとをあはれものとみえうちに漸くやうやく十四人
をのせ下米塚村乃本村へとつけ又上米塚村の舟

とわけ二艘にて我子も此人るとの外乃こりなく本村へ
送り一人もとをあやまち候事なかりし是より後に流
れし家財木なとをとりよくれわけさせしかは此者を
つねに堤川岸なとみまはり此節ハやゝもすれは主を
くに防きしく大いなる救ひにてらしめたりし此大水に
一村のうちも人て家之数あまた川ニ座ニて流しける
よりれ何なと律義ならす人馬とも小恙なし是
全く岩之丞か力あるといふ宝暦八年領主より銭を
あたふる事期ことなくとりあつかひたりし

孝行者久之丞

久之丞ハ若松乃城下老町といふ所の者なりしかさなる
よりうまれつき貧窮にして家のうち親族まても睦しく
組合なとの御里此人まても諸をも次父を久左衛門とて
此年ちかゝりせぬ母ハをはる中風を座りて手足も
かなはす家乃内をもあるかなしハ久之丞妻ともなくま
村そひくゝ出れを抜け外やうる事も皆とにま
かせ又大語をもれ所ニ出へ往来の人をとゝめ世話まん
さ以人をもれへ日まなとひつきそれあつかひ
商人のあれすすれ何くまとを渡果といひきつけ
二役の数も人のよにりくれるも物てる少にて母此起

出しけるには洗ふ水を運ひ冬には足をあたゝめ具
をとゝのへつゝすゝめて手を添て洗わし既に夜も目乃
あはぬ折ハかたはらにありて物語なとして菓子共
出しくはみをさせ又小歌なとうたひて心をなくさめ乃
うちにしたりしを医者をよひて日ゆちやうけ外し
先々もの労にむくふへく食物あひ物をも恵遣しける
かゝる試みて湯わかし行て療治せんといへともつ
かの者にまかせ主人ハ心ひとつにてなき事をのみ苦
おもひ行けれハ病るまゝ日数を経てもはらつきなひ
ともにあつかひに来たりぬる物をも主人ハ家に帰るまてく

こゝかしこもりぬ冬になりて病人手足をひえ又はことさら
なやみはらすと思ひ桶に入て温湯をとらせ其度乃
風呂またたくさくしてせ行年ものくるめとあらきりし
かつ井に毎度とらせぬ又同し城下行人町といへるもとき
かけり惣右衛門とて父久左衛門か身乃あやまりに家に
久左衛門か母はもと先ゝ亭て久左衛門病て死ぬ程なく
是もつかは此母北るをとくれくとなけきさくあつく
仕へよといひしを思ひ出て久しく嬉しと喜ひて祖母のもと
へも日夜ゆかりにつかひて安否をとひ又うせく将ものは
く祖母をいたはりつゝ是も好くおもはぬ伯父の惣右衛門

もかくのごとく貧しきくらしなりしかハ何くれと心つき
米なと調へたらさるを補ひつゝまめやか
に洗ひすゝきのわさなりし者又吉か所業を称し然るに
訴へ申せしかハ米代あたへて褒美ありしとそ
宝暦十年乃事となん

孝行者加津右衛門

若松乃城下寺町に加津右衛門といふ者齢六十七年になれる
母あり若き頃父におくれて母ひとりをやしなひける
業とせしか母世をさくましけれハ母人くるまの二事
加津右衛門か妻ともに人あるをいたはりしと加津右衛門

きて母人にわかれたるも悲しけれとも心くるしきは
心よからす父ハ久しく母乃心をいとほしみ孝をつくさん
と貧しくなりてゆくも母人への孝行をなさんとて
後見の妻とも逆へて母乃好む程のものハ價
高くしといへとも必求めてとゝのへ参らせ
見せちくめ或ハ菓子煙草なと其外やうの物何くれ
ことの人多くたのしませ朝夕の膳には魚を添へて冬ハ
母の肌をあたゝめ夏ハ涼しき方へ
つれゆきて楽ませ又親族のかたへ
行んといへハたすけて連れゆきかへらぬ時ハ迎にゆきて

しやう此日の日のせみ侍るおもひゆき　又げんとえらり
なるむかひに行てあるまゝ見ま秋乃彼岸又法談なと
ことゝいふ事に行ま高ひ乃まねりる必ゑうつてさくお
おえ家に久しかそら此母せ夜冬乃衣きもまえくるゝく
かゝぬなとり身にまとゝひ月乃裁ちのあしきとも
みつからせおもひ行くちなきさあゆう母乃ねちもよう
ぬさまよあれ又業とさそうかいてらぬてとなくやしるひ
あ川りひぬ町乃うち此日此よまくし和らうきさしてらき
何ゆうも人のうまやことしちのけ事ちつくしく宝暦十年
能き人得たみ此日あり公より善ことらせさうとき

孝行者小吉

孝行者留之助

大沼郡蕎麦目村の民に小吉といへる十四石余もてる
ものあり留之助とて小さきより心ざし深く領主を敬
ひ貢物怠らす親族にも睦しく郷里にも和順せ
り父小吉は生つき甚悪くして目明ならざりけ
れは家の内の事ともみな留之助か後は兄弟両人としきりに食
物重に分けて農事に心を入ば公役にも出るにつきて
もあえゆるすをさくむとせうつり敏則ぶ則幼く此にも往ふ
さきに物ごしう夏八蚊をとき山にかきれ風を寄せ

或は紙帳といふものをはりて蚊をふせぎ兄苗之助ハ
枕もとにありて扇拍子を伺ひ二便の世話をもあつ
かひ寒さつよき時ハ葉をとらちやをもうけて炎
燵さし衾をとこさせ火箱を抱せ夜もすからなでとく
もなりしか七八年此かたは母腰たゝぬものとなりし
を兄弟の養ひよろしき二便の事食事菜煙草や
うれしきものは清く常に備へ置ひさらに失とかたりあ
ひあひ五十に及ひしか八兄弟ことに哀をとりて日
ごとに墓にまうでしきりにかく兄弟貧しき中より
も筆墨の及ふにんとうせ極楽に事に八年ともぬ

きまれにとらぬ節をもちつくへき交りたる穀を少しまた
文年頃うひとしふ馬をつくりかく田畑乃持ひかりも
ふかく稼ぎにて馬をもかへ貴ていやくを請ひ人のいい
ねをえしくるまでかうのくもしとゝかちゆえらん
かなしひらぬしとゝひてひ備くをかうされハ養乃苗
代と田の苗附のるまえけぬきよりくなる須ふかり
よく馬をかへて此事をも別ざる八農事にをく
ゆくものかを此くし能主に行とその寛暦
十二年兄弟わものへ年貢あたへてよ示すと称せら
せたりん

孝行者八右衛門

若松の城下西名子屋町に八右衛門といふものあり年
ころ酒を造りてなりはひとし質素にして世をわたりけるが
人となり淳直なりされは商人は利をむさほる
ならひなるを利のすくなきを好まさりしかは徒ゐに見里
の者はさらに心ともいはす家をはなれて酒をかう
けるものおほかりし此頃は腹くるしみ親は七日町に
ありしかは人々かく八右衛門は其の末の子なりしかは
兩親の家をはなれしと二親もにてかたりしにあり
しか父をうしなひ今は母のみなりしかはいあはれにもいかにせと

ね父の臨終にもむきてくるしみしかれは母ともにとよみて
病のうちに居りて男女ともに情うすくしては
みな八右衛門かいひにまかせて家のつゐを知るもの
いでし兄弟ともに中よくしけるは
と八右衛門かせしかれ扱ひさとえて中むつまじく暮し
に母の心を安んせしむ母ならひに祖母ともに七十八なり
て北小路の大和町にありしかは日ことにかよひて起居を
たすけつかへけり年を経て家
居にかへりしは兄の心をやすんせんとて
事をもなされはやむることを好みて兄にすすみて

家を新ふし祖母の老をいたはりたすけつかへたれは
女をつかはく例よりもくはしくむかへえらくのみなれは奴婢く
くらゐ世わたる業にはやゝ商ひのなりはひをもうしなひ
侍るものにはたゝしくおはへいまもしめしてれはなみたをとう
営みは拙けくいさゝかも利足をうる事ならて文をか
身をとをそうくれしもの八色ゝわれより外は茎をとひくしきなを
つくは貸銭をあつくぬ召文町名子屋町ふ窮民あ
はらく領主より此貧人扶持ほかにし侍りけるのをえ
は哀うすることとこくまなそうして締いふてる哀は
ぬすをとこの名をとるゝしして人をかくゆゑ十二人すくなくをとり

しか後はそのつかえもれとも甚しくるゝか誠なる志を
感しいふかもしかる世はいかふむきをいさとももうさいや
とんかしとて邊里の者也八右衛門かに賞をえ
のみたりを後は償ひ人をもともかれ利足をせえん
は親しく出つかへの金銭をかりゆゑえ事滞
なくてを備こゝろをそくらすれは年をてともにのるかあ
まと久もも又は用をけへつ並えるとゝまり暮ゝ海
しき事なく堂宮のもくり神茶もとも人もまらぬ
ましはあるかにはいうるかたく家業をもとより費は
まかさ親族に睦しかりまし八里の者ならず

と戒めし由八右衛門か事をのミいひあへりけれは其か
宝暦十二年領主より褒美として米をあたへぬ其
かるに八右衛門ますく母に孝をつくし貧民に物を
施し出入の者にも炭薪をもし給は己かたくはへ
へ置るをもちて価よりやすくあたへけれは利をとらす
去る年隣の町にて大火に行き財を失ひ民共
救ひけれは年ことに其ことを謝して褒美の米を
給ひけるとかやされと此家安永四年とかや

孝行者太右衛門

右太右衛門は若松の城下七日町にすめる塗物を商

ひし者世におとなしきものに生れつきまめやかなる者なり
けれは兄弟五人ありて母は七十にあまり大町の兄
養右衛門かもとにありしに太右衛門年頃孝をつくし
風雨のわかちなく毎日のやうに兄のもとにまうて母の安
否をとひくさ／＼の物語して心をなくさめまうすおのれ
こと悔みともいはす母にも慰め悔らしむ又同町に
すめる婦のもとに母のをり告志をもせさせにゆく
家にかへりても後ね佛堂にはしめ食るにもあまし
それ母の好めるものは折々とりとゝのへてはこひ贈
らしむ魚なとは出来して価のたかきをもいとはす

求め得しもさらなる事なれとことさら母の心
といさめん事を思ひはかるもいとひくなといふ
て母乃かたに携へゆき佳く味ふをみて悦ひぬ
出す父の忌日には墓まうてなとして家にかへる人
くとハいまし悦く常ふと父乃忌日なれハ家の内の
ものハいうもさらなりなとくとも慎てう
居けるを里の者しれりのあはれハ金銭をわかちあた
へてその志を称ふる多くありてその家産も乏しく
かゝる次男女なとめしつかふものなれとも其まゝいや
まちある時もいとく此たひなきを年頃ひつくしく

いましめつゝ八十ちを越くわか身ひとつに商売の事にて
かたらく母死りしより後く事なうさ語とも其乃
事をつゝゐ帳を消せしく手つから初穂の数かそへ
絶く継の甚く必くる行ひせし帳をこひてそゆれ
きなる母をさこるハ太右衛門のかたに来りて居しに
いよく孝心深かりし一二年た過ると八あゆともなる
しけるをハ厠乃あるすまとも人の手をかりて次醫
者を招き薬をもとめ看護いたしさるすなく
かくこゝろも紹かはくらせなりは看病をとりなん
墓にまうて詣るれつとめん怠らす太右衛門か兄

太郎右衛門ハ肯の同居なりしか是れも多病にありて
しのちよろつ肯の事もたすくしかるを太右衛門兄
をうしなひ父れてくれる代法にもたすけ有れ
極月太郎右衛門もうしなひ妻もともにうせ甥の若八と
いふものとたれをひとりて此しく先祖より来る
此肯此同居もありかくて家屋敷も金むくし
主の方ち手ゆ法の為みよりつり居しけり右衛門
つゝくおりふしに家を失ひしる中此村里多く出
来ぬはいたましくしかれとくはせんと粉骨をくた
しあつくそのまゝ扨て田畑をも贖ひけり

甥の身のまゝおひ然をも僕ひ兄の家屋敷をとらせこの
しかるに是くゝ肯同屋となふしけり此事領主より
まことにたゝれ銀を宝暦十二年褒美として是をとら
せけり

孝行者茂雅右衛門

孝行者さき

若松の城下南町に年貢地をすみける茂雅右衛門ハ丈
婦ともに渡世をなりに正しくけりの母ありしか母は
七十にあまり中風をわづらひて手足もかなはすまつせ次を
しを丈夫しゝてか代あつかひを療治にしむともとろしき

異れつねく嘆ひまゐけるとゆりけれハ己貧
しきりしる家乃内四人くらし難長聰右衛門ハ桶ゆゑ
わさなりしく世をわたるひとも一人の力にて立かたく
の人を養ふをりとなす子ハ筆札張替をしつるか
賃銭を人なミにはとらす妻ハ人の付ら人なる
機をきゝ又ハ衣ぬひ洗ひなとして得る家の粮
若此中に母を養ふ事人よりもすくれ孝心不足
婦子供母乃ふしとまゐりて安否をとひ一人たま
る此湯をまゐらしてまめ成あらせ髪をゆあけ
一人ハ母の膳を調しく食をすゝめ食をすれなと

すか若子の若次郎ハ煙草にたとゝらしく祖母より
きハせさくこうち食もりをすゝめぬ粉もの病者の
従ふ色あれハ飯くひさしてもいちれゆさ好ぬる
かたよ麻をとうりしさそく飯さしある其ともとき
きゝのうち妻ハ薬代きて何となも薬代さとなく
兄家ありうてむつましく病者のとこちにまゐる
して走る京大坂江戸なとの此揚持しく慰めなり
長聰右衛門用ある文なとの其ゝ織事にいらなく
出る時も必母に申すとゆひもまうけりひあへ
ねもきて家にて細工せしなとものまえいかまいたん

こしなハいさゝかも商の利あるへくもの事なくなハ
やゝくかへりぬへしなといひけれと家のうちのもの
ふと病者となりにけれハいとゝおそれハ老よ
母のよろこひのいとらしなからなく数かちに
あらそひの言葉さへなくて母も近里のよしにハ
いつも是よいふ事を拾ひとてもその身よ出ゆきく
世乃中のありさまとかくかはりぬるよしを付けり
おもひしものハ面白く老をやしなひ給乃生も
あしとおもひけり兄姉夫婦姉妹の家に母のゆ
くはとて兄弟出あつせふ物ひ妻もつまうひよろむくの人

四季折く花鮮やかなる梅桜乃花折る松などに
おほえ又は園の花をさそなふ遊ぶのたくはえ
あるさま友乃日頃あつまりて茜摘に水多くたへ
中に小魚をとりおち忠扇の風わかけすしかるう
め秋は田面乃たのしそひの雲のなとをまてなりぬも
しらぬ夜はいふ言なくもゆく末をもえむ
と熱湯をさまたけきし冬乃日ハ母のもとへ来たり
あたゝめて火燵をまうけ温石とにふ物を夜乃
中にもつよき足あつさて和ゆるゆ寒さ夫婦のうへ
肌よりもぬいぬるとあ妻ハ床をのへたにたく

ものとけしたる薬代よくゆきとゞきやりつけもしかねけり
つくまゝくゝれ抱へいたしわが身を拯させたり
若次郎が孝子なるよしきこえけるをつたへきゝしハ老松ならびに
なよ竹のゆかりの者をはじめ小松をたゝへおくべきよしに
領主氏よりもきこえて寶暦十三年褒美をさし給
丈助乃ものに薬をたまひけり

孝行者若吉婦

若吉婦ハ若松乃城下當麻町にすめる若吉か子なり
むまれつき実義にして諸人に睦しく父母に
孝あり母ハ四年さきより中風になりて手足ら
たゞ次吉諸をもたちなるをさがくに醫療をはかく
し寺院そのほかさいはゐにまゐりしは祈んとし又若草の人
目もいたみ手足のいたみあつき夜ハ川へもまいらせゆきかね
涼ませしめ湯にとぶらひまつかひおくハ湯婦にいだき
とらくわりもせまかりしとて又ハ稚子乃あつかいなる
ふとき手すくはにしてとらつ足の上にて抱きさのせよくいと
ゆよせ紛着の起卧も人の手をかりそのは家貧しく
衣類も食味もともしくおほくてはふるを二夜のけかくに
しるし苦をとらくつらさをはおさへ乳母しくむかいひさまかり
かくれをと声ならしまほしく祇るをれにみるありさまの

子をひきてさま〴〵に寺社に人をもして祈
りけれと験もなくて其後の七月弟うせぬ父若六
も病つきしかは医療のかきりをつくしけれと母に先たちけれは
悲ひあつかひしに老衰へたる身にしゐかた志れも
まくらもあかぬ父母に手をつくしとて日夜貧苦の身
二親の身まはりの事迄を終日によつて見秋より入病者
のいぬるまて務くせられ其後質素春ても怠る事なく
心力を尽しけれと宝暦十二年五月より褒美を
して米俵とらせけり

忠孝者清助

清助は耶麻郡西連村の百姓なり若松の城下本郷
小路町の医者服部友徳か下男なり人となりまめやか
にて十二歳の時より仕へしか主人の心にかなひ身を分ち
けるか忠義のつとめのみならす親族に睦
く他里にある父親しくかはりなき友達をも一人の下部な
かも療治のすゝめ家士まても小町田舎にもとゝ
きと見めくれる手業をおもても夜に入ては
これより体もせされは代役を薬をとりて朝夕も
食をもあたへけれ米をもちてをもてなしけり光なる身に
も疲れもなくかくも病くやみて怠ることなかりしを

にかすといへる人にて夜まゐるまでねずことさらの病
者ある時ハ病婦とも二三夜も病家にゆく事
あるに薬箱おひ行くをいとひなく家に帰るを
もおそけたるに業ならひするまでおきてゐて帳ある
時ハ業をとらひ金預くれをかれの依て家に帰れ
内の老母もかゝる人料とて銭を未明に起きて合力す
を調し菜菓をとゝのへ夕飯のまうけし主人ハ
薬あつかへる時も家ハまへの膳をとゝのへ叔父へ
乃使又ハ入来る人のもちをもてなし病家の不用の事
なかりけるを主人ますりしを男に病あるときもふし

ぬるおりにありしさまをもつ洗ひなどとゝのへ筆にしるし
家居門ゑ乃ことを好屋へまゐりてを結ひわれの人とも
塵払ひするなく風雨の時も夜をもいとはずまで勤め
こんなりけるを在家の親一人妻子ともありしか
わくよりの貧家乃子とかれは子ハ村里に出て洗人
親の病ある時は妻よくかれを孝ゆけしとそ
主人をかけ出し家を帰らすして外ゟとゝく帳を
らせんといふまたく一人あるをまかうしと知りて猶又
不用もをのつからよく又一人の子にもあらすそれ病
家の用をもうけんも便なくしてとくかへりて親の病

まくらのけまし八夜てらふ主人の用事のいとまのうち
親のかたにゆきて病をとふのミならす常に孝心
ふかくして飯を妻子にかくしとらせてまゐらせの
よくせしかは井に治せられたるぬくもりの追肴
をもたらしめ春秋にハ洗濯のわさをもなし古
仕し老をやしなふ家にハくるしまするを一人の下
部をもたくはへさる病家のありさまあはれなりとて
帳をとこそ洗衣服のやきいにてあるハ便りを見て
ふる里につけやりしに妻も又心をつくしとゝけ
そのまそくの人なりし此事主人より領主に訴へいて

しかは褒美として宝暦十二年といふに米をとらせ
せしとそ

孝義録巻之二十一